

# 体育理論における指導 ～言語活動の充実を目指した授業づくり～

千葉県松戸市立第一中学校 教諭 山藤 陽

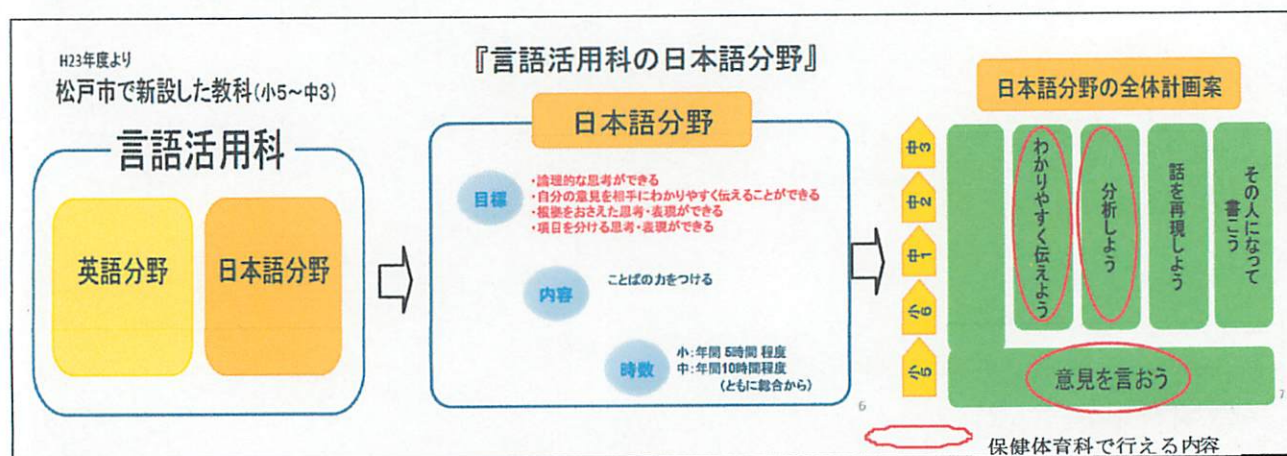
## 1 はじめに

2000年に始まった PISA 調査の結果から、子どもの読解力、情報活用力や学習意欲などが課題となり、その解決の手立ての一つとして、言語活動の充実がクローズアップされてきた。平成24年度から完全実施される新学習指導要領の総則「教育課程編成の一般方針」においても、「生きる力」のうち「確かな学力」の3要素（「基礎的・基本的な知識及び技能」「問題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」）を確実に身につけさせていくためには、「言語活動の充実」と「学習習慣の確立」が不可欠となることが示されている。

このことから、保健体育科の教育目標を達成していく過程において、「言語活動の充実」と「学習習慣の確立」をめざす指導の手立てを講じていくことが重要と考えられる。

## 2 研究のねらい

平成23年度より松戸市では「言語活用科」が新設された。その特徴は、小5～中3までの5年間英語を軸とした「英語分野」と、「言語活動」の基礎・基本となる言語技術を土台とした「日本語分野」の学習である。この2分野の学習を通して、自分の意見を相手にわかりやすく伝え、相手が伝えようとしていることを理解することができる生徒を育成し、将来グローバルに活躍できる人材の育成を目指している。（図示）



本校では、5年前から「言語技術」の授業を総合的な学習の時間に実践しており、今年度も言語活用科の協力校となり、学校全体で研修・実践を進めている。「言語活用科」の新設により、今まで積み重ねてきた「言語技術」の実践をヒントにし

た工夫を各教科・領域・日常生活で行い、言語活動の充実を下支えする力をさらに推し進めていくことを今年度の研修課題としている。保健体育科でも、言語活用科日本語分野の全体計画案にある「意見を言おう」「わかりやすく伝えよう」「分析しよう」を教科指導の言語活動におけるテーマとして捉え、研修を進めている。

そこで本研究においても、「言語活動の充実を目指した授業づくり」をサブテーマとして、「体育理論」のうち「運動やスポーツの多様性」の学習を通して、「特有の技術や戦術を分析する力やわかりやすく伝える力」を高めさせ、研究テーマにせまっていきたい。そしてこのような取り組みを通して、新学習指導要領の来年度の完全実施に向けた準備を進めていきたい。

### 3 研究の概要

本研究では学習指導要領に示された体育理論の指導内容の中でも、

#### 1) 運動やスポーツの多様性 (1 学年)

ウ、運動やスポーツには特有の技術や戦術があり、その学び方には一定の方法があること

に焦点を絞り、言語活動の充実を目指して授業を実践した。またその際に ICT 教材を活用することで、生徒たちが授業内容を視覚的に捉えることができ、興味・関心を引き出し、より活発な意見が出やすい環境がつかれると考えた。

#### (1) 文章からのイメージ化

サッカーワールドカップという広く知られたスポーツを題材とし、文章から具体的な「技術」「戦術」をイメージさせることでの言語活動の深まりをねらった。

#### (2) 映像から良い動き方を見つけ、表現する

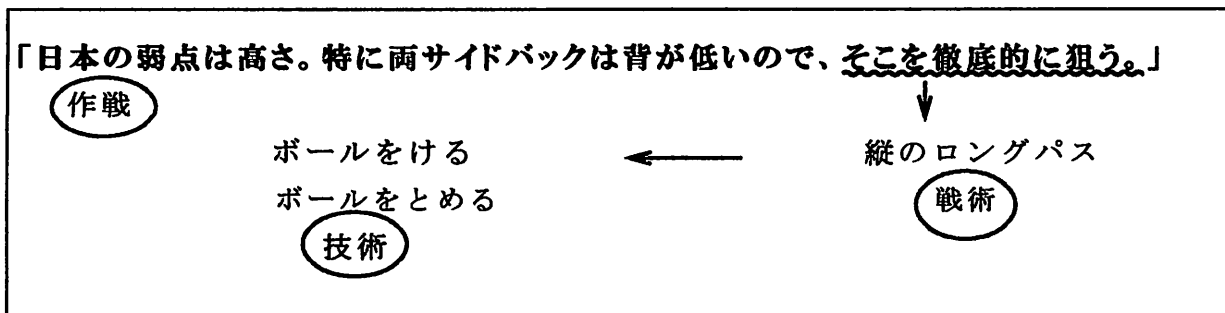
「技術」「戦術」「作戦」の意義を理解させた上で、バレーボールのビデオを見せ、発問を工夫することで、映像から良い動き方を見つけようとする学習活動を通して、思考力や表現力を高めるという言語活動の深まりをねらった。

#### (3) 運動やスポーツを学ぶ学習習慣の確立

この授業実践が、生徒たちの日常生活におけるテレビ等でのスポーツ観戦においても、「戦術」や「技術」といった視点で捉えることに繋げたい。そして日常のスポーツ観戦や体育の授業内の練習・ゲームなどでも、勝敗を「戦術」や「技術」の優劣から観察・分析する習慣が身についていくのではないかと考える。

#### 4 研究の実践

(1) サッカー → 文章からスポーツをイメージ化し、技術や戦術を学ぶ



「技術」…そのスポーツがもつ特有の技

(例：ドリブル、パス、シュート、トラップなど)

「戦術」…持っている技術を使った戦い方

(例：センタリング、ワンツー、スルーパス、速攻など)

「作戦」…どのような戦術を用いるかなどの全体のねらいや方針

(例：自・相手チームの特徴を話し合う)

サッカーワールドカップという広く知られたスポーツを題材に文章から、技術・戦術・作戦についてのイメージ化を図ったが、大部分の生徒がテレビでサッカーの試合を見たことがあるために、スムーズにイメージ化が出来たように感じた。

(2) バレーボール→ビデオ映像から良い動きを見つけ、表現する

発問：「バレー部の人のパスと、そうでない人のパスを比較してみても体の動きのどこが違うのか、良い動き方とは何か発表してみよう」

##### ① オーバーハンドパス

発表：「ボールの落下点に素早く動いている」「手の位置が高い」「脚を伸ばす力がボールに伝わっているように見える」

##### ② アンダーハンドパス

発表：「ボールの落下点に素早く動いている」「腕を大きく振っていない」「腕が平行移動している」「アゴを引いてボールを引きつけている」

発問：「どんな技術を組み合わせているか、どんなメリットやデメリットがある戦術か発表してみよう」

##### ① レシーブ→キャッチ→スパイク

発表：「2つ目をキャッチすることで、つなぎやすい」「トスを呼ぶ時間の余裕が出来る」「ブロックされやすい」「相手もレシーブの隊形がつくりやすい」「正規のルール上のプレーではない」

##### ② レシーブ→トス→スパイク

発表：「正規のルール上のプレー」「レシーブからアタックまでが早いので、相手手が取りにくい」「自分達も早く動かないとついていけない」

##### ③ ブロック

発表：「スパイクが打ちにくくなる」「アタッカーにプレッシャーを与えられる」「スパイクのコースが限定できる」「レシーバーが1人減る」

#### ④ 速攻

発表：「ブロックがつきにくい」「タイミングが難しそう」

発問に対して、以上のような発言・発表が見られた。具体的なビデオ映像から、技術例の中から良い動きを見つけさせた。戦術例の中からどんな技術が使われているか、さらに実践した時のメリット・デメリットを思考し、それらを的確に表現する生徒が各クラスで見られた。発問を工夫したり、掘り下げることで、より具体的なポイントを押さえた発言が見られた。それぞれの授業の中で、表現を共有できたことやお互いに意見を述べ合うことができたことも、今後の各領域での話し合いなどで生きてくると考えられる。

#### (3) 授業を実践して

本校第2学年の男子8クラス（2クラス×4）147名を対象に行った。

##### ① ICT教材を利用した授業展開

生徒たちの感想でも、視覚的に捉えることができ、わかりやすかったという意見が多く、好評だった。

##### ② ワークシートの工夫および展開スピードの工夫

ワークシートについては、簡単なものにとどめたつもりではあったが、記述に時間がかかる生徒にとっては、ICT教材の展開の速さについてこられない難しさがあった。テンポよく発言・発表を引き出すように心がけたが、ついてくるのが精一杯という生徒と、考えを深めながら記述する余裕がある生徒との差が感じられた。また発言・発表が積極的にできる生徒と記述が丁寧な生徒とが必ずしも一致せず、ワークシートの工夫や発問の工夫、さらには授業時間に合わせた展開のスピードの工夫が課題であると感じた。

#### 5 研究のまとめ

本研究に際して、千葉県小中学校体育連盟松戸支部の事務局員で研究会を開き、松戸市の新設教科である「言語活用科」の流れをくみ、保健体育科の教科の中でどの様な授業実践が可能であるかを探った。体育理論の学習では、他の領域と比べ、言語活動を活発にする場面を時間的にも多く設定できるため、これを足がかりとして他の領域でも言語活動を高めていくことが期待できる。

先行研究のため、担当学年である第2学年で実施したが、今回の学習内容については第1学年で履修することが望ましい。3年間の系統だった体育理論の学習と、高等学校での学習内容への系統づけが図れるであろう。

今回は技術・戦術の例としてバレーボールについてはビデオ動画を題材に授業展開をしたため、その後の「E球技」バレーボールの単元で活発な言語活動が展開できた。松戸支部の研究会では、他の領域のオリエンテーション等で活用できるように技術や戦術のビデオ作りを行っており、その共有を図ることで、保健体育の学習指導全体で言語活動の充実に役立てていけるよう考えている。